

馬場靖雄編著：『反=理論のアクチュアリティー—
The Resistance to "Theories"—』：ナカニシヤ出
版，2001年，B6判，244頁，2,500円

平田, 暢
福岡大学人文学部：教員：数理社会学，地域社会学

<https://doi.org/10.15017/923>

出版情報：人間科学共生社会学. 2, pp.179-181, 2002-02-15. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

馬場靖雄編著

『反＝理論のアクチュアリティー — The Resistance to “Theories” —』

(ナカニシヤ出版, 2001年, B 6 判, 244頁, 2,500円)

平 田 暢

本書は、「理論というものがもつ批判的なポテンシャルを再開示する」(まえがき)ことを目的とする。そこでは、いわゆる「社会学理論の危機」が、「理論と実証の往復運動」などの枠内に切り縮められていることが指摘され、そのような意味における「理論」に対する「反＝理論」こそが求められるべきものとして主張される。そのような反＝理論は、現実を解明・説明することではなく、現実との衝突や闘争を望む。そして、反＝理論自身がそのような闘争を実践することで、社会学理論の批判性の回復が期待されるのである。

本書ではそのような闘争の場(アリーナ)として、6つの章が用意される。1章「二つの批判、二つの「社会」」(馬場靖雄)は、否定神学批判とルーマンの社会システム理論を補助線として用いながら、社会に対する批判的アプローチの可能性を探求している。本書を構成する各章のアプローチはまったく多様で、内容が直接的に重なる部分もそれほど多くはなく、編著者自身も、どの章から読んでもらっても良い、と述べている。しかし、この1章の特に結論部は、6人の筆者が共通して持つ、それゆえ共著として成立しえた社会学理論の「批判的」機能を明確に述べている点で、プログラム・ステートメントとしての位置をもつように思われる。以下、2章「政治とノの哲学、そして正義」(北田暁大)は、リチャード・ローティを批判的に論じることを通してプラグマティズムの帰結を明らかにし、3章「規範のユークリッド幾何学」(竹中均)では、大澤真幸に依拠しつつ、ユークリッド幾何学の第5公理に基づく社会規範のモデルを提示している。4章「社会的世界の内部観測と精神疾患」(花野裕康)は、観測者と観測対象の分離を前提とした外部観測のはらむ問題と困難さを、チューリング機械や精神疾患等、周到に用意された道具立てを用いて指摘し、内部観測過程の萌芽を描出する。5章「行為としてのフーコー」(園田浩之)は、フーコーと遭遇することで社会学はいかに変貌したのか、変貌しうるのかという観点から、経験科学の認識論的凝着を崩しつつ、あたかも地図を描くように線を引いていく行為としてフーコーを位置づけ、6章「社会における「理解可能性」と「理解不可能性」との循環」(表弘一郎)は、アドルノがウェーバーに社会の理解可能な契機を、デュルケムに理解不可能な契機を見出し、個人の問題系を循環的に捉えたプロセスを追い、単純な主観と客観の背反性を否定し、批判的な理解を試みるアドルノの社会理論の可能性を示している。

紙幅の都合上、すべての章を検討できないのが残念だが、評者にとって興味深かったのは4章であった。2つの側面からのマクロ現象の論理的多様性の指摘、生活様式の偶有性の指摘を

通して、そもそもミクロな（相互）行為が不定さをもっており、仮にそれが一意だとしてもマクロ現象の多様性は払拭できない、という外部観測の困難さが論証され、外部観測に内部観測過程が萌芽する契機が説得的に描かれている。

ただ、いくつか疑問がないわけではない。概念として捉えた場合、外部観測と内部観測とは対立的であるが、実体的に外部観測と対置されるものとして内部観測は存在しえるのだろうか。筆者の議論を追う限り、外部観測の困難さに付随する形で内部観測が実体的に存在している観がある。外部観測の陥穽にはまらない内部観測はいかなる形で可能か、あるいは連続的に観測そのものを捉えることは可能か、可能な場合、外部性、内部性を識別する閾値のようなものは存在するのか、など、外部観測、内部観測を総合的に整理できる視点があればより望ましかったと思う。また、外部観測の不可能性は、いわば1つの反証が成立した時点で、すなわち極限をとる形で指摘されているが、極限をとらない場合、つまりある妥当な範囲で外部観測が可能になることはありうるだろうか。これは批判というよりも、ごく単純に、外部観測を、内部観測過程を踏まえて用いることができるのではないか、という発想に基づいている。その際、単なる認識の問題としてではなく、実証レベルにおいてどのような方法を用いればよいのか、仮に「外部観測不可能理論」があるとすれば、いかに作業仮説化できるのか、アイデアが膨らむところである。

本書全体を通して考えた場合、理論の可能性を高めることを意図するのであれば、理論が展開するベクトルを考えておくことは無駄ではない。おそらく反＝理論とは闘争であり、闘争である以上ベクトルもルールも無用である、ということにはならないであろう。その際、批判的であることを目指すか否かとは関係なく、一方では作業仮説化、すなわち「理論と実証の往復運動」へのベクトルを考えることができる。このベクトルのみに理論が矮小化されることを筆者らが強く否定していることは首肯できるが、理論の展開の可能性としてまでは否定できないであろう。

他方、理論そのもののフォーマライズというベクトルも考えることができる。個々の理論がより体系的なフォーマル・セオリーとして成立するとき、反＝理論はより批判する力、闘争の場を広げることができるように思われるのだが、いかがだろうか。初期的なフォーマライゼーションの試みは単純系、線形、個人主義的な形をとり、社会的ジレンマ研究の端緒に見られるように、個々の行為の結果が線形に加法的に作用する単純系が想定されていた。この限りにおいて、反＝理論とは相容れそうにない。しかし最近、行為者間の相互作用、社会からのフィードバック等にも目を向け、複雑系、非線型、集合主義的なアプローチの必要性が強く意識され始めている。たとえば、本書の1章で取り上げられているルーマンの複雑性の概念は、フォーマライゼーションの可能性を感じさせるもののひとつである [cf., 岩本, 1997]。

欲を言えば、このような理論のベクトルに関して、また各章に関して、最後に6人の筆者の討論（闘争？）が用意されていたなら、本書の面白さがより伝わったようにも思う。いずれにせよ、本書は、コンスタティブ（事後確認的）な次元ではなく、パフォーマティブ（行為遂行

的) な次元において、現代社会が特定の本質からは把握できないことを示しつつ、その営為の高い可能性を示すことに挑戦した、刺激に満ちた一冊だということができよう。各章で語られた反=理論が、今後どのようなベクトルを持ち、闘争を展開していくのか期待されるところである。

文 献

岩本健良, 1997, 「フォーマライゼーションの展開」, 岩本健良編, 『社会構造と過程のフォーマライゼーション』, pp.3-8, 文部省科学研究費報告書.